

機関番号：10101

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520086

研究課題名 (和文) 「ヨネ・ノグチの美学」の比較受容史的研究

研究課題名 (英文) The Comparative and Historical Research
for the Aesthetics of Yone NOGUCHI

研究代表者

北村 清彦 (KITAMURA KIYOHICO)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70177864

研究成果の概要 (和文)：ヨネの思想や美学は哲学的に厳密に規定されるものではなく、「日本的なもの」を詩人的直観に基づいて俳句や浮世絵の中に見出したに過ぎない。「西洋対東洋」という図式の中で、英語で詩作している限りはこの図式は微妙なバランスを維持していたが、日本語で詩作し始めた時、このバランスは崩れ、それぞれの国の文化を尊重する健全な「国粋主義」から、日本の文化を欧米のそれよりも勝るとする極端な「国家主義」に堕してしまったのである。

研究成果の概要 (英文)：Yone established the “Western-Eastern” dualism in his early days. As far as he was aware of himself as a person with double citizenship who could belong to neither the West nor the East, this dualism kept a subtle balance as a dualism. But when this balance was broken, the naïve and sound nationalism, which took pride in its own country and respected other countries’ cultures, had fallen into the extreme ultra-nationalism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：美学・芸術学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：ヨネ・ノグチ イサム・ノグチ 文化的二重国籍性、外山卯三郎、牧野義雄、戦争詩、国粋主義、国家主義

1. 研究開始当初の背景

ヨネ・ノグチ (野口米次郎、1875-1947) は 18 歳の時、単独でサンフランシスコに渡り、詩人ウォーキン・ミラーの山荘に暮らしながら、詩を書き始め、1900 年に第一詩集 *Seen and Unseen* (『明界と幽界』) を、さらに 1902 年に *From the Eastern Sea* (『東海より』) を発表して、ウィリアム・ロセッティ、ローレンス・ハウスマン、アーサー・シモンズら多くの文学者に称賛され、一躍文壇の寵

児となった。日露戦争勃発後の 1904 年の帰国に際しては幸田露伴が歓迎の長詩を新聞紙上に発表するほどの熱烈な歓迎を受けた。1906 年に慶應義塾大学英文学科の主任教授に就き、その後 40 年にわたる教職のかたわら、多数の著作を日英両か国語で発表、オックスフォード大学や世界各地に招かれ、日本文学、芸術に関する講演を行った。「東洋のホイットマン」と称された彼は、英語で詩集を刊行したはじめての日本人として知られ

るのみならず、その思想や芸術観はイエイツらの象徴主義にも影響を与え、戦前、欧米の文学界ではアジアの詩人としてはインドのタゴールと並んで高い評価をえていた。だが欧米の物質主義に対して東洋の精神主義を唱え、1937年勃発の日中戦争はアジアを侵略する欧米列強を駆逐する「聖戦」であり、ギリシャ独立戦争におけるバイロン、アイルランド独立戦争におけるイエイツに自らをなぞらえるかのように、若者を戦争へと駆り立てるような詩を盛んに発表していた。そのような国粋主義的言動に対して、戦後の文壇は厳しく戦争責任を問ひ質したが、彼自身は何の釈明もしないまま、まもなく没したのである。そのためにヨネの思想や美学を論じることはいわばタブーとなって、今日ではほとんど忘れ去られた状態にある。

2. 研究の目的

没後50年を記念して『野口米次郎選集 全3巻』が刊行されたのをはじめ、2006年末には英文による著作集『ヨネ・ノグチ(野口米次郎)英文著作集-文芸作品・評論・詩集-全6巻』も刊行される予定で、再評価の動きが少しずつ進みつつある。それはひとつには、ヨネの息子である彫刻家イサム・ノグチの世界的評価が高まり、イサム芸術における東西文化の矛盾的共存という特質が父親のそれと重なっているように見えるにつけ、その実態を明らかにしなければならないという要請があるからである。また第二にヨネが忘れ去られた存在だとはいえ、欧米における日本の芸術に対する認識の根幹にはヨネの思想が今なお根強く関わっており、他方で彼らの日本芸術論に接したとき、ヨネの思想と美学を正確に継承していないわれわれ日本人には何かしらの違和感を覚える一因になっているようにも思われるのである。したがって、その国粋主義への批判は当然のことながら、ヨネの思想やその美学をいつまでもタブーの次元に埋もれさせるのではなく、その全体を再構築して相対的な評価を行うべき時期に来ているからである。それによって世界の中での日本の芸術の特質を欧米の研究者たちと議論する土壌が整えられるとともに、その不十分さを指摘し、誤解を解くことも可能となるのである。

3. 研究の方法

上記の研究目的を遂行するためにはするためには三段階の研究が必要であると考えている。すなわち第一にヨネ・ノグチの美学の全体像を再構成するという作業がまず必要となる。第二にヨネの美学思想の受容史的研究が有効である。しかもそれを国内・国外において、戦前から戦後、そして現在に至る

まで、どのようにヨネが評価されてきたのか、つまり空間的・時間的な座標軸の中でヨネの思想の受容状況を立体的かつ客観的に比較し、マッピングするのである。それによりヨネの芸術論の背景に国粋主義的な思想があるとしても、その批判的検討が可能となる。応募者自身は、ヨネを単純に国粋主義者と見なすことはできず、後に述べるようにイサムとの対照により、ヨネ自身が文化的二重国籍者であり、それをむしろ覆い隠すために国粋主義的思想が強調されたのだという仮説を立てているが、そのようなヨネの思想の再評価、あるいはそれを取りあげることの是非をも含めて、とりわけアジアの研究者との真剣な議論が必要になるかもしれない。第三にその上でヨネの美学の現在性が検討される。欧米人の日本の芸術に対する見方にいまだ幾分なりともヨネの影響が残っているのではないか、あるいはわれわれ自身の考え方にもその痕跡がないか、もしそうであればそれはどのような点なのか、そしてそれは今日でも通用するのか、それとも重大な修正をしなければならないのか。欧米の研究者とも意見交換をしながらこの点が明らかにされることになるだろう。

4. 研究成果

ヨネ・ノグチこと野口米次郎。この忘却された詩人の名を私が初めて目に留めたのは、30年近くも前のことになる。当時、ルーマニア出身の20世紀を代表する彫刻家ブランクーシのことを調べていたところ、イサム・ノグチが自ら願って彼の助手となっていたことを知った。だがその時イサムの父親がヨネ・ノグチという英語で詩を書いた最初の日本人であるというところまではたどり着けても、二人の互いに対する関係や感情についてはほとんど知ることができなかった。ようやく1997年に『評伝 イサム・ノグチ』(白水社)や2000年にドウス昌代の『イサム・ノグチ 宿命の越境者』(講談社)が出版され、また後者を原案とする映画『レオニー』が2011年に公開されるなどして、ヨネのことについても一般に知られるようになってきた。しかしそれらはすべて息子イサムから見られた父親像、いや正確に言えばイサムの伝記中に登場する、相当程度に脚色された父親像である。皮肉なことに息子イサムの名声が高まれば高まるほど、アメリカでレオニー・ギルモアに私生児を産ませ、はるばる異国にやってきたこの母子を見捨てた非道な人間、野口米次郎の悪名が巷間に伝わる結果となる。しかしそれとは別に詩人としてのヨネ・ノグチについて正当な評価がなされるべきだろう。近年、没後50年を期に『野口米次郎選集(全3巻)』(1998年、クレス出版)や長年ヨネの研究に携わってきた亀井俊介

氏の監修による英文著作集全6巻(2007年)も出版されるなどして、再評価の動きも徐々に現れてきたところである。私は2007年トルコで開催された国際美学会議でヨネ・ノグチに関する研究発表を行い、海外の日本文学研究者の間でいまだに彼のことが記憶されていることを確認した。

野口米次郎は1875(明治8)年12月8日、愛知県海東郡津島町(現、津島市)に5人兄妹の4男として生まれる。地元の小学校を終え、名古屋の県立中学校に学ぶが、14歳の時、親に無断で退学し東京に出た。とはいえ兄たちはみな東京に住んでいたのだから、米次郎にとってはさほど無謀なことだとは思われていなかったのかもしれない。翌年、慶應義塾に入学するが、学校に行くことをあまり好まず、結局ここも3年を待たずして退学している。当時、英語学習を奨励する社会的機運もあって、米次郎も幼い頃から英語に強い関心を持って学んでいたし、俳句にも親しんでいたというが、17年間の勉学がどれほどの語学力や日本文化に対する深い理解をこの少年に植え付けていたかは疑わしい。

いくつかの興味深い例がある。第一詩集を出す際に、編集者が表紙に光琳のデザインを使うことを提唱したが、20歳の青年は光琳が何者なのか知らなかったという。またロンドンで彼の詩集が評判になり、文学関係者のサロンに招かれたとき、北斎の富士山の浮世絵が部屋に掛かっている、その説明を求められたが何を話せばよいのかわからなかったという(ただし、おそらく同じ晩のエピソードとして、多数の見知らぬ人たちの間で心細い気持ちであったが、北斎の富士山を見て、勇気づけられ、積極的に皆と会話を交わすようになった、ともいっている)。また後年、『日本美術読本』を上梓するが(昭和3年)、その記述に今日の美術史的学問水準を求めることは無理だとしても、誤植を含め、明らかな間違いが散見される。「本阿弥光悦」とすべきところを「木阿弥光悦」とし、ていねいに「もくあみ」とまでルビを振っているのは、その最たるものである。

ただ1年間ほど同郷の「国粹主義」を提唱していた志賀重昂のもとに身を寄せていたことはその後の彼の行動と思想に大きな影響を与えたと思われる。志賀は札幌農学校卒業後、軍艦筑波に乗船し、オーストラリアやニュージーランド、南洋諸島、ハワイなどを調査研究する機会を得た。また登山に親しみ、「日本アルプス」などの命名者としても知られる。1894年に刊行された『日本風景論』(岩波文庫)は日本の地形の特質や美を指摘し、日本近代の最初の地理学の書籍とされている。志賀のいう「国粹」とはどの国にも他国が模倣できない「特有の元気」があるということであり、それぞれが自国の「国粹」を保

存しなければならない、という主張それ自体はむしろ素朴ですらある。だが『日本風景論』では、地誌に関する科学的記述と詩歌絵画などの芸術作品の情景とを、何の媒介項も挟まず無防備に結合させてしまうが、そのような修辞学に支えられて国土の賛美は容易に国家の賛美へと転化する。日清戦争の起こったこの年、国威発揚的な意味合いを含めてこの著作はベストセラーとなった。志賀がまさにこの著作を執筆していた時期に米次郎は志賀のもとで寝食を共にしていたわけであり、17才の少年は志賀の冒険譚に心躍らされ、またその思想に感化されたに違いない。

この志賀の家に入出入りしていたサンフランシスコ在住の日本人のつてを頼って、米次郎は18才を待たずして「渡米」する。薩長出身のエリートコースを歩んでいるわけではない彼は国費による「留学」ではなく、ほとんど無一文の渡航であった。「スクールボーイ」というのも正規に学校に在籍して勉強する学生のことではなく、学校での雑務をこなす職種である。人種差別もあり、人間的な扱いを受けず、尊厳をも傷つけられる生活の中で、それを耐えさせたのは立身出世の志や向学心であり、士族の末裔としてのプライドであった。だがこうした生活の中で「西洋対東洋」という二項対立の図式ができあがっていたことは想像に難くない。米次郎にとって屈辱をもたらす「アメリカ」は「物質生活」であり、「文明」であり、「喧噪」であった。それに対する「日本」は「精神生活」であり、「自然」であり、「沈黙」であった。ただし、この括弧でくくった日本とアメリカとは、米次郎がその実像を深い次元で理解していたわけではなく、彼によって理想化された日本であり、また矮小化されたアメリカである。また実を言えば米次郎がこの「日本」を見出したのはアメリカにおいてなのである。米次郎は20才前後に3年ないし4年に渡って、オークランドの山荘に隠棲していた詩人ウォーキン・ミラーのもとに住み込んでいる。ミラーは現在では知るものも少ないが、ホイットマンに連なり、エマーソンやソローにならって自然の中に暮らし、その霊性の体験に基づいて詩作していた。そこを米次郎が初めて訪れた時、ミラーは次のような意味のことを言ったという。

「おまえには何も教えないし助言もしない。だが言うておくことがあるとすれば沈黙の価値のことだ。それがわからなければ自然の本当の心情もわからない。」

つまり「自然」も「沈黙」もミラー山荘にあったのである。しかし米次郎にしてみれば、それは「アメリカ」側にもものではなく、あくまでも「日本」側にある。あるいは「日本」では当然だと思われていたそれらの価値がようやく「アメリカ」においても認識され始

めに過ぎない。その限りで「精神生活」の点では、「日本」の方が「アメリカ」よりも優れているのである。そしてこの「自然」と「沈黙」の「日本精神」を英語によって表現する詩人が誕生したのは、1896 年末、彼が 21 歳を迎えようとする時であった。

この第一詩集（『明界と幽界』）、翌年の第二詩集（『溪谷の聲』）はささやかな成功だった。しかし 1903 年ロンドンに渡り自費出版した、『東海より』は 27 歳の無名の日本人青年に文字通りの成功をもたらした。厚手のブラウンペーパーに活版印刷された、わずか 16 ページで 200 部限定の、あまりにささやかな、しかし 2 シリングという当時としては破格に高い値段がつけられた詩集は評判を呼びヨネは連日のようにロンドンの文学界に招待された。その評判は日本にも届き、同年 10 月には日本の出版社から第 3 版が出された。それは、同じような不遇の在外生活の中で長く友情を保ち、後にロンドンの霧を描いて名を知られるようになる画家牧野義雄の絵が表紙を飾り、新渡戸稲造の序文と志賀重昂の跋文が載せられている。志賀は少年時代からヨネを知っていただけに、今回のこの成功が決してヨネが英詩に精通しているからでも、作品が優れているからでもなく、日本人が英語で詩を書くそのもの珍しさと、東洋的な情懷が評判になったに過ぎないのだから、決して浮かれることなく更に精進するようと、釘を刺すことを忘れない。また新渡戸はヨネの詩をよく読んでいて、それが東洋と西洋との幸福な結合から生み出されたものであること、大胆な言葉づかいや韻律によって絵画的で素朴な日本の情愛が授けられたこと、そして「何か感じられはするが言葉にすることのできないもの。漠然と推しはかれはするが言い表しえないもの」が表現されている、と書いている。この新渡戸の指摘はヨネにとって、まさに我が意を得たものであったことだろう。のちにヨネはイギリスに招かれて「真に最上の詩は…沈黙の中に歌われている」、「まったく歌わないと言うことはすべてのことを歌うことなのだ」と講演する。この逆説的な詩論は、「暗示」の重要性を主張し、象徴主義につながるものでもあるが、その当時マラルメに代表されるヨーロッパで最先端の詩論も、ヨネにしてみれば既に日本では芭蕉によって実現されていたものなのであった。俳句は「沈黙」を限りなく「沈黙」に接近することによって、すなわち 17 文字という極小の形式によって現出させようとするのである。

その国際的詩人が息子イサム（勇）の誕生を見届けることもなく、帰国したのは翌 1904 年、日露戦争の記事をアメリカに配信する特派員としてであった。映画「レオニー」のストーリーはこの時期から始まる。1906 年には

慶応大学の教授に就任し、英文学を講じると共に、日本の俳句や浮世絵、能などを英語によって盛んに紹介した。ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）亡き後、自他共に認める日本の文化大使的役割を担ったのである。先にも書いたとおりヨネの日本文化に対する理解がどれほどのものだったか疑わしい。帰国後、確かにヨネの日本理解は急速に進んだ。だがそれは英語によって思索する詩人の直観的理解であって、厳密な方法論に基づく研究者のそれではない。趣味を中心とする芸術の批評は正確さを欠く危険があり、自身の趣味が無責任で移り気であることを知りながら、その趣味に導かれて作品を見るという態度をヨネは貫く。

そのこと自体が問題なのではない。欧米で培われた「趣味」、あるいはアメリカで見出した「日本精神」をヨネが英語で表現している限り、それが矛盾をはらんだものであっても、百万の語を費やすことによってその矛盾を多少なりとも埋めることができる。実際、「沈黙の美学」を説きながらヨネの評論活動は実に饒舌であり、矛盾こそがヨネの創作活動の源泉であると言って良い。だが奇妙なことに旺盛な文筆活動の中で、一つだけ行われなかったことは日本語で詩を書くということである。日本語による第一詩集（『二重国籍者の詩』）が出版されたのは帰国後 17 年たった 1921 年のことであった。ヨネはそこで「僕は日本語にも英語にも自信がない／いわば僕は二重国籍者だ／日本人にも西洋人にも立派になりきれない悲しみ／不徹底の悲劇（抜粋）と嘆いてみせる。しかし問題はヨネが実際に「二重国籍者」であり続けることができたかどうかである。日本語で「日本精神」を説く詩人・野口米次郎が誕生した瞬間、矛盾はもはや矛盾ではなくなる。野口米次郎は「二重国籍者」ではなく単なる「国粹主義者」、それも極端な「国家主義者」に墮すのである。

例えば昭和 16 年 12 月 8 日に書かれた「宣戦布告」という詩は「われ声を大にして殉国の秋を叫ぶ／ものども決起せよ、剣を握れ／汝いたずらに奢れるもの、敗北を満喫せよ／汝いたずらに人を侮るもの、死の前にひざまずけ／われら頭上に万世一系の聖天子をいただき／民億兆の血潮、百万武勇の兵を通じてあふれたり／われら征く、ただ前進あるのみ／進め！進め！」（旧字は新字体に改め、仮名遣いも改めた。抜粋）といったものである。このような戦争詩を書く理由は稿を改めて論じられなければならないが、米次郎はギリシャ独立戦争におけるバイロン、あるいはアイルランド独立戦争におけるイエイツに自らを重ね合わせていたのだろう。戦争に関わりを持った文学者や芸術家は米次郎だけではないが、戦後、深刻な絶望状態に陥った

者もいれば、戦争責任を自己批判した者、まるで戦争などにまったく関わらなかったように振る舞う者もいて、しかしそれぞれ問題を抱えながらも活動を続けている。

イサムによれば、戦後まもなく朝日新聞からイサムに対して戦争についての論評が求められ、その記事が第1面に掲載されたのを読んで、米次郎から戦時中の自身の言動は過ちであったとの内容の手紙がイサムの元に届いたという。この手紙は慶応大学に寄贈した文書の中に紛れてしまったかもしれないと、イサムは述べているが、残念ながら私は現在までのところそれを確認できていない。米次郎は空襲で焼け出されて疎開していた茨城県豊岡にて1947年胃癌を患い死去したため、それ以外に発言は伝えられておらず、少数の愛読者、研究者、親戚（北海道における美術の黎明期に必ず名前が出てくる外山卯三郎は米次郎の長女の夫、すなわちイサムとは義理の兄弟の関係に当たる）らの関心を除いて、やがて忘却の淵に沈む。米次郎なりの「沈黙の美学」を守ったということだろうか。

以上のことから、ヨネ・ノグチの美学を「文化的二重国籍者の美学」という、より大きな枠組みで考察することができる。例えば息子のイサムももちろんこの系譜にはいる。ヨネとイサムの父子関係の実情はともかくも、イサムが芸術家としてのヨネを一つの目標としていたことは確かである。正式に認知されていないにもかかわらず、「ノグチ」姓を名乗り、グッゲンハイムの奨学金を申請する際には父ヨネが詩で行ったことを、彫刻の世界で実現したいと書いているほどである。またヨネと同時期にアメリカに渡り、ロンドンでヨネが詩集を発行するときにも尽力した画家牧野義雄も同様である。さらにアメリカからフランスに渡り実業界を捨て文学者となった永井荷風は、一時期慶応大学でノグチ米次郎の同僚でもあった。二人の立場は全く異なるが「文化的二重国籍性」の観点から比較することが可能となる。その他、小泉八雲、藤田嗣次、外山卯三郎など、この系譜をたどることによって、日本の美学のこれまで考察されることの余りなかった、国際性と閉鎖性との軋轢や矛盾、そこに留まることの困難さなどが明らかにされるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 北村 清彦, 芸術作品としての「疋田写真」—その記録性と自己目的性—, 疋田豊治 ガラス乾板写真展図録, 査読無, 2009, 72~73.

② KITAMURA Kiyohiko, The Aesthetics of Cultural Double Citizenship: The Case of the Japanese Poet, Yone NOGUCHI, CONGRESS BOOK 2, Selected Papers XVII. 査読有, INTERNATIONAL CONGRESS OF AESTHETICS, 2009, 133~140.

③ 北村 清彦, 「環境」と「芸術」, リテラポブリ, 査読無, 16~17, 2008.

[学会発表] (計2件)

① 北村 清彦, 「北海道における建築的芸術作品の新生・再生・創生」, 北海道芸術学会第16回例会, 2011.3.12, 北海道立近代美術館

② KITAMURA Kiyohiko, Aesthetics of Cultural Double Citizenship—A Case of A Japanese Poet, Yone NOGUCHI —, XVII International Congress of Aesthetics, 2007.7.9, Ankara, Turkey.

[図書] (計3件)

① 北村 清彦他8名, 北海道大学出版会, 北方を旅する—人文学でめぐる九日間, 2009, 59~90.

② 北村 清彦代表編集, かりん舎, 自分を代表させるような仕事はまだありません。—村岸宏昭の世界—, 2009, 160ページ。

③ 篠原 資明, 北村 清彦他8名, 岩波書店, 岩波 講座哲学07 芸術/創造性の哲学, 2009, 89~110.

[その他]

http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/edition34/littera34_pdf/littera34_16_17.pdf
http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/edition34/littera34e_pdf/littera34e_16_17.pdf

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 清彦 (KITAMURA KIYOHICO)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 70177864

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし